

寛永諸家譜

藤原氏癸卯五冊之内戊五
支流

138

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186 (138)	
函號	特 76	1



徳永
比企
比多
比呂

喜日
源津
廣戸

寛永諸家系圖傳

藤原氏

卷二十五

支流
徳永

昌利

公佐守
江列祐部
伊庭よじゆる

淺草文庫

石見守 式部中法外

慶長三年冬后秀吉薨去此後五

年より壽昌より信長のいさく

速小朝の小朝を陣乃軍勢と悉く朝

とよつこの旨秀吉此言也といふ壽昌

國々滑るはくろとよつこの要事と

秀吉在世乃時よつこのいさく今何ぞ

やとく同心とくや然里といふとも

東照大権現の旨命あつはをれをち

所説りをいさくのいさくのいさく

大権現は秀吉より一則并伴吉助少輔

忠政を所使していさくのいさくのいさく

朝鮮よりいさくのいさくのいさくのいさく

海朝はいさくのいさくのいさくのいさく

あつは

大権現所一代の規模なりと

作小

あつたはるりなきひく

大権現大権現のりくりく朝鮮朝鮮の波海波海一一給給ええのり

うねふよりくうねふ壽昌壽昌のりくのりくけきくも

命命ををけけのりのりりり同年七月七日

纜纜のりくのりくおお弘弘一一朝鮮朝鮮よりりく

給給のりくのりく軍軍勢勢ををのりくのりくひひさ

ひくひく海海綱綱を

同四年八月并伴同四年八月并伴忠政忠政と奏者と奏者のりく

壽昌壽昌のりくのりくのりくのりく御味御味ああと成と成へへま

旨旨のりくのりく書書ととううけけのりくのりくままつつるるとところころり

忠政

大権現大権現のりくのりくこれとあこれとあへへ血判血判のりくのりく書

をを壽昌壽昌のりくのりくううつつるるのりくのりくら

台徳院台徳院殿殿のりくのりくけけのりくのりく御書御書ととるるふ

ええととおおくくほほのりくのりくのりくのりくのりくのりくのりくのりく

今度大久保今度大久保活部活部少輔少輔のりくのりくとと付付る

一紙一紙被被御書御書のりくのりく内内書書のりくのりく御書御書

兼兼右右のりくのりく活部活部少輔少輔のりくのりく御書御書入入由由会会

依志真候中野中其内内府
以入魂可為中野中其内内府
之、候し

極月五日 明宗武親書

德永法下

同左の如く

山若山

うねり

大権現城列 依見白鶴ノ御座と云し

予等と云ふ井伊重政中多中務大輔

志務林原式部大輔康政と云ふ

橋邊此作書と云ふ

同五年 長尾系務深叛乃と云ふ七月

十二日 喜島思田前長政と云ふ

江戸ノ御座り

大権現ノ御座り たくし 同月二十日

大権現

台座院殿下野國小山守於交り御

を後あり御るところは石田治部少輔
之成もさしこまふとひく板

大権現小山をむく壽昌とありて

乃諸士此和なるものと云ひいられい

うろさーとありせくと海とありと

なりありをひく壽昌なりとあり

是森法下相もた 仲乃自と法と

若 台智ありとさつらくと海

壽昌が嫡子昌を

大権現乃磨下り

壽昌武列 厚木乃権宿りある時

奥年友兼尉御使とあり

は年くいくと方此諸さしひ人質

を之成りありとあり

然るをの味方とあり

をひく壽昌ありとあり

幕下

幕下

一 所先自ら形くべき自誓紙と
云と云々の事なるは流列にある次男
昌成を人等らとせんごるに列台田り
す孫ま池田と名申射輝政りけり
く之海をもてに八月八日壽昌濃列
高松乃城り久家とま之成高本
八郎左門尉が居取高次り一高城
いしんとは同日十月十日壽昌二とせせめや
うす取り高本と海糸一とせし丸毛

ら郎高束がたくこ家福塚乃城城
せめおと名これと記京極若狭高
高次御味方とありく大津乃城
りたかくこもるうとひく壽昌
列伊庭より決炮乃玉茶と大津
乃城りをく家軍ら高なること
之成の軍高これとまて船とうらひ
少るこれりよりく大津りませざる
事らもまら一高たあり

二亦^{ふた}も^もま^まき^き 壽昌^{しゅしょう}が 妻子^{しよし} 城^{じやう}列^{りやう} 伏見^{ふし}ふ
あ^あり^りか^かこ^こ 執^{しやく}と^と 侍^{しやう}て^てひ^ひえ^えり^りふ
洛^{らく}湯^{とう}り^りか^か 家^け之^の 城^{じやう}これ^{これ}と^とい^いく^く 壽昌^{しゅしょう}
か^か 娘^{むすめ}と^とり^り人^{ひと}質^{しやく}と^とて^て 大^{だい}坂^{さか}乃^の 中^{ちゆう}丸^{まる}と^と
同^{どう}年^{ねん} 九^く月^{げつ} 園^{えん}原^{げん}合^{がっ}戦^{せん}乃^の 時^{とき} 壽昌^{しゅしょう} 池^{いけ}田^{でん}
伊^い豫^よ寺^じか^か なく^{なく}こ^ころ^ろ 信^{しん}列^{りやう} 約^{やく}野^の 城^{じやう}と^と
せ^せじ^じこ^こ 城^{じやう}を^を せ^せに^にい^いく^く け^け 務^むく^く 後^{のち} 伊^い豫^よ寺^じ
と^とい^いく^く 壽昌^{しゅしょう}
と^と 城^{じやう}と^とい^いけ^けと^とる^る 伊^い豫^よ寺^じ乃^の 後^{のち}

大^{だい}権^{けん}現^{げん}井^い伊^い佐^さ政^{せい}本^{ほん}多^た伊^い波^は守^{しゅ}正^{せい}信^{しん}り
余^あ一^{いつ}く^く 伊^い陣^{じん}乃^の 軍^{ぐん}功^{こう}と^とる^るこ^ころ^ろ
め^めい^いま^まふ^ふと^とい^いく^く 壽昌^{しゅしょう} 伊^い佐^さ政^{せい}と^とい^いく^く
と^と 負^おけ^けり^りく^くと^とい^いく^く 家^けこれ^{これ} 軍^{ぐん}忠^{ちゆう}人^{にん}り
こ^こえ^えふ^ふり^りく^くと^とい^いく^く 伊^い佐^さ政^{せい}と^とい^いく^く
同^{どう}十^{じゅう}七^{しち}年^{ねん} 七^{しち}月^{げつ} 十^{じゅう}日^{にち} 信^{しん}列^{りやう}と^とい^いく^く
率^{りつ}と^と 衆^{しゆう}六^{ろく}十^{じゅう}四^し 信^{しん}名^な 植^{ちやく}岩^{がん}

昌重 まさしげ

没五位下 こまのまけ 左馬助 生國 うぶくに 継前

寛永十九年六月十九日羽列了

をひく年 しほひ と 歳六十二

昌濂 なり

式部少輔 しきぶのすけ 生國 うぶくに 左馬

慶長九年 五月ら

大権現了 おほごんげんりょう 行久 ゆきひさ 左馬

同十四年十二月没五位下了 しやう 叙正

同十九年元和元年大坂 おおさか 右大臣

陣了 あらい 先昌重 さきまさしげ と 松平 まつだいら 一 く 信 のぶ 重 しげ と

侍 さむらい と 心

昌貞 まささだ

右兵衛

寛永十九年十月十一日 しほひ 了

將軍家と源礼よしのぎ

昌勝まさかつ

後五任下

下総守しもとのり

生園英流いこの

家紋あざな 葛丸くずのまる

行元

八郎

源為氏みなもとは久軍功ひさぐんこうありゆへに
武列ぶりつ足立郡あだちぐんを領りやうするが下したと
たまたま此詞こゝろありい

表目

為氏

判

下

去日八郎行元

可令早領知氏為國足立郡

桶皮郷内菅谷村七郎事

右為勳功之賞於雷郷之雷前

充行や者早守先例可致由治

し状如件

觀應二年九月十八日

某

兵庫助入道

源基氏書とさうく

源基氏書とさうく

某

兵庫助入道

源持氏乃と記軍志とぬらん此に

少は感状と授と此詞よいさうく

去月五月廿八日武列府毅向山来
今信在在、雨、陣、新、年、同
八月二日堂列小栗城合戦之
时致志高、由安房四郎意真
雨、中、や、む、神、妙、向、後、深、可、抽
戦、由、之、状、如、件

應永廿一年八月廿一日

持成 判

去月廿八日武列府毅向山来

果

八郎右郎

果

下総寺 後寺庫物と号と
之、松、取、定、り、志、高、此、加、信、と、て、之、今
雨、と、さ、し、り、波、文、あり

景定

下総書入道 生國武苑

ろろろ若菜乃城之太田之樂かもと
ろろろ武若大ゆらろろ之樂嬌
男源五郎とろろろ河内源五郎と
家督ろたえとろけゆへろろ見
石和ちろけろろろ京定ろろろことと
ろろろ之樂と隠居せろろろ源五郎

を若菜乃城之太田之太田之樂かもと
のちろろろ之太田之太田之樂かもと
とろろろ政團一柄とろろろ今ろ
をひくこれろろろろろろ政文
田通をろろろろろろ感申之通と
とろろろ

天正十八年小田原陣のち景定
なろろろろろろ射自城本とろ
海門外ろけろろろ門をろろろ

忠是つていゆる事とをよ
くたらしつて之を桃とて大なる軍を
をよげしに氏政と初と貴と是列
奈右首のつりををひく令邑と加信
と志れなるとと決首りをひく
経廻の首となるとつり氏政氏房
これと貴禄と事十二及びなら
そのら小田原落城とつり氏房は
つていひ高野山といふもつり肥前唐津は

ゆさ氏房逝去のほ法神をけと地
東照大権現本多依波と正信と沙使
少くくに出され来地子五百石と後
つてつて後本多と野分正純とをもて
沙旗奉行は 治村とつてつら乃
乃命ありといふとつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつて
乃状これあり

慶長五年 関原改陣乃後伏見

了をひく治部少輔丸再より二十餘
をあつら大自其沙着とれむ
元和元年七月四日伏見よをひく
死と歳七十五 治部不安

家吉

左衛門 生國回前
置定と松崎く若葉よをひく
京定より志こひく山回京より

氏政よつふ後氏政の命よらりて氏房
了属と下野國よをひく赤松依竹
合戦のち他家台先陣よりとみ
敵二端をうらとわ祓をわらふ
下間乃武智とあひとふと地多甲
此城りをひく敵陣よせい
けとま敵を能殺中とらと実と
中よも味方此軍よはくゆり
と形とら勝利を得敵一掃をうら

教令所乃府とかがうういをひて氏房
多此軍号を賞と

天守十八年小回忽落城乃後まゝ氏房

りささび高野山をさびり肥利

唐津りゆさ氏房没して後櫻船と

これと記是定と本好しくめさく

大権現り掲し〜〜〜里合祿と

〜〜〜 作をか〜〜〜

台徳院殿り〜〜〜り号合清書

を以て免と後大沙書をつとじ是定

死〜〜後家台 作とがふ甲治部少輔

丸とあつ〜〜〜ら二條河原大平此

御書をは〜〜〜

寛永十六年四月二日り死と歳七十九

法名傳勝

家次

右為尉 生國日前

七歳乃と起たつつ

大権現大り大錫錫一一つつ向向り

名徳院殿名つつふふりり

寛永七年寛ととらら

將軍家將り將つつふふりり

家か書しよ

孫まご吉よし 生國なまくに同前

大権現

名徳院殿名りりつつふふりり大おほ徳とく書しよとと勅しつ

三十二歳三少せうくく死しをを法はふ名な宗そう伸しん

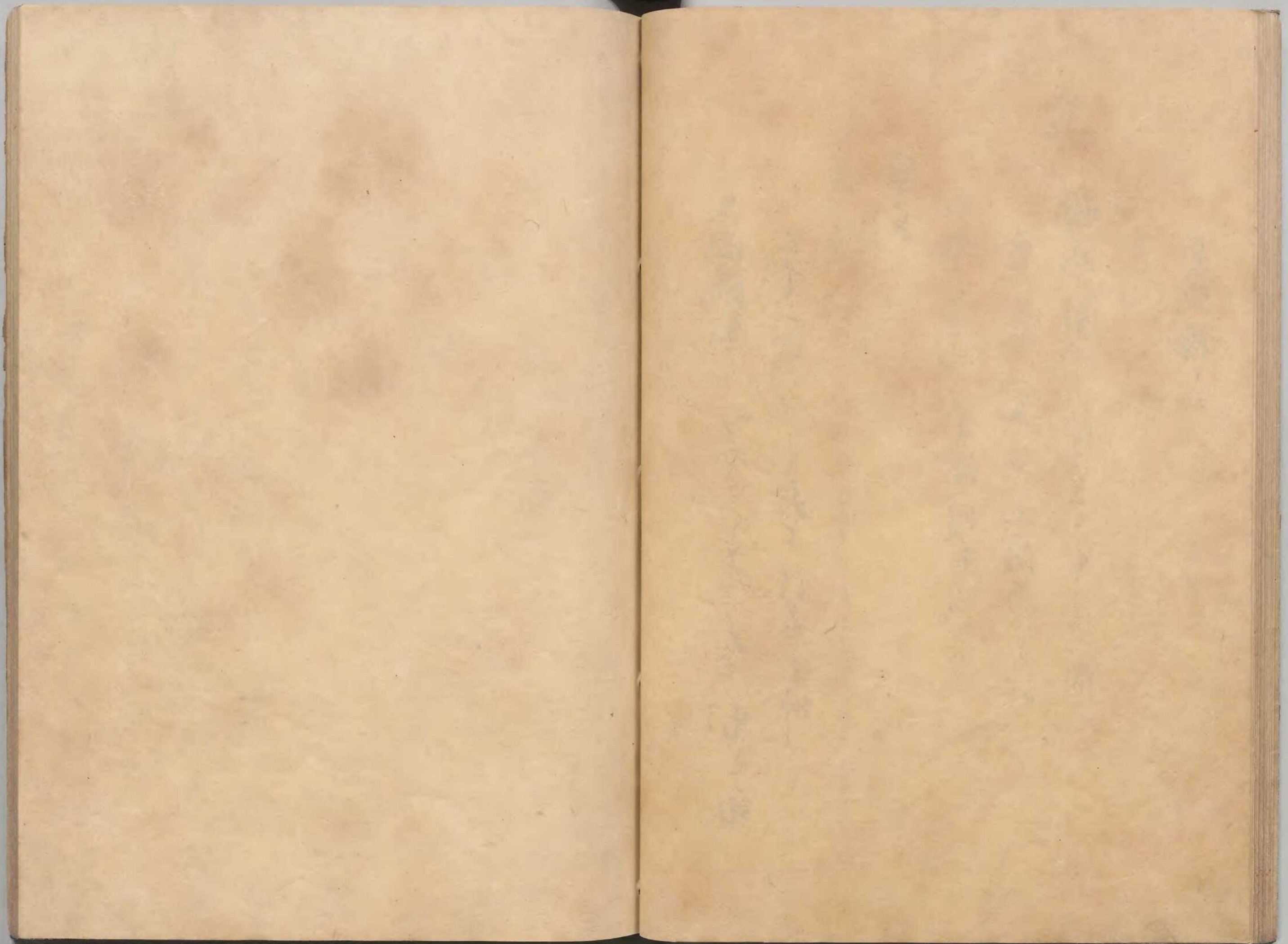
家か定ぢやう

依よりり右みぎ馬ま 生國なまくに同前

寛永十一年寛十じゆ五ご歳さい乃のとと起た

將軍家將り將つつふふりり

家か故こ輪りん宝ほう



比企ひき

家傳かでんよいくく比企ひき判官はんくわん義貞よしさだ頼朝よりとも

了りょうひひ頼家よりえ了りょう武列ぶりやく比企ひき

入間いりま高篠たかしのの三郎のさぶらうをを徳とく建仁けんにん二年にねん

九月くわがつ二日ににち小條せうじょう時政ときまさががああ小謀せうぼうせせ家け

けけ地ちいいまま胎内たいないありありああ子ことと

そそここ地ちよよくくはは家けりり比企ひき乃の

若殿わかにん親おん高たかきき比ひ利り南なん頼より貞さだ了りょう

子の建保六年に於て十七歳に
して瀧川
吹徳院に侍る
きくまつるに於ては
ついでに十四代に侍るに於ては
あつて政世清系をうけつたに
りては事ありしに

義次

たす助 生國武苑

徳倉井所より五十九歳に
死す 法名普賢

政負

たす助 生國同前
周東と松より政及戦功あり
弘治年中に松が使にありて後列
今川義元がもとにして義元後継と
もなり 政負とてくさつたにあり

変り政負るとこれじとて家元
これとて家元の名をとて
めくこれを見せしこれ也

東照大権現後列小松

多氏席より御来臨あり

永禄四年相列小條とありて

教及軍功をありて格が家元

大田弟濃も資政書をさつ

五十九歳少く死す 法永清月

則負

右る物 生國同前

幼少の時とて同之野分がほあり

天正年中幸陸國吉備道之筑波

乃下りをひくありて陸下乃

首級を得たりて下野の國皆川と

太平山よりをひく相つて陸下

首級を得たりて武列比全郡

り撰所と

慶長六年越前中納言秀康より

めりしとされけりし

同八年病より比企郡中山より

屏所と

同十八年川越よをひく

大権現本多依波吉正清とてく剛貞と

めりしと

翌年病ありし

大権現より

家久

沙菜美病急百粒をくまふとて
作をくくり家久看病と
元和二年二月十九日五十九歳に
死す 法名元光

次右衛門尉 生國 同前

多岐み 今川義元後子と撰政貞を

賞せし事と

大権現に祈りて出されたはまのま日
下総守同友兼同佐松野栲博も亦り
政負の子孫を御勅ある事ありま日
松野より一々つらつら家出の兼久
湯一もより一好まじと成れぬ
慶長十六年を列瀆松をひく自
所村を執ト一々つらつら則めらねく
はふまらる
大坂あり及此御陣は徳将とつて
い

元和二年

大権現御名例めと記兼久が先祖乃
事をおり一々つらつら出されまばく
命あやめて在地比全郡乃うらり
をひく合邑をい備らんぬとれ
とも兼久不幸に一々つらつら去年此終り
と年よりつらつら病かく口く屏
船とこれいよる此御恩賜は終り
大権現豊洲乃ら

名徳院殿よりけふたぐり

寛永九年

將軍家よりけふたぐり

同年河津奉行より

重負

次々 生國同前

寛永二年

名徳院殿よりけふたぐり

同五年俸禄と

同九年

將軍家よりけふたぐり食禄を

くまいた

同十年食禄をあつて未地と

つま

女子

井戸心算り書

久負

いふ

藤十郎

氏名江戸
りう角

家紋凡乃角
り割菱

源津かつ

今案いまえんより及えん中藤氏乃

系けい図ずより源津かつ氏し乃なり清和せいわ

源氏げんし此こゝ流りゅうより源津かつ氏しあり然しか也なり

也なり家傳かでんより本ほん付つける善安ぜんあん氏し

稱しょうよりゆへえいとくこれとて

了載りょうざい

正利

源七郎 生國冬河

廣忠ひろたけよりついでに後

東照大権現ひがしあき小治こぢくくゆつ

天正十九年正月廿五日七十一歳

去々死を法名定心きん

正吉

源七郎 源七郎尉 生國同前

天正十二年長久平合戦乃と記

大権現おほごんげんより信のぶ守まもり小牧こまき口ぐち小こととひひく

高名と云ふあり

慶長五年

右徳院殿みぎとくゐん小治こぢくくゆつり馬ま回まわ

か籠かごりししふ

同十九年大坂陣おおいさか乃と記渡わたり

山やま城しろもが銀ぎんの屑くず伏見ふしの城しろ青あお城しろ

寛永七年六月廿二日六十九歳
——く死す 法名 瓊雲

正務 まさむら

市古束

生國 駿河 とろが

寛永七年父正重まさしげが遺跡と爲なり

為家より傳ふたぐす月家

同十四年同二月七日二十四歳

——く死す 法名 通教 とほき

正之 まさゆき

甚右衛門 生國 武藏 むさし

正務まさむらヤ——なひく子と爲るハ正務まさむら

才なり

寛永十五年正務が遺跡と爲 なり

——く死す

為家より傳ふたぐす月家

正則 ただのり

後友馬尉 生國同家

大指現小指久たきゆり 園ヶ原陣 せきがらまげん

なほひり大坂南度乃御陣 おのり

信守をむかし

台座院殿 つえ 仕たきりつ家

寛永四年六月廿一日ぬ十日歳下

とく死を 法名玄海 げんかい

定則 ただのり

後友馬 生國武苑 じけい

寛永十一年より

將軍家よりつゝつゝつゝ

正但 ただのり

弥友馬尉 生國三河

台座院殿よりつゝつゝ

廣長五年高田陣より信吉に
同十九年大坂御陣乃時去後山城を
領り居し信吉は
元和元年伏見に城を築きしと
いふも是は誤り江戸御陣の
書を以てしむる

將軍家よりつたはるもつ
寛永四年正吉死し後信吉を
かゝり大坂を領り乃時行はる

正信

同十八年六月七日大坂よりをり
病死歳五十八法名玄光

右大坂門尉 生國武苑

慶長十九年より

大徳院殿よりつたはるもつ大坂
あきの御陣より大坂御陣中より正次
が領り居し信吉は御陣より
より

將軍家より久たき戸は

寛永十八年五月二日甲午五歳小

一く死と 法名宗廣

正後

秀吉 生國同前

正者や一たひく子と成るは勝

五郎右衛門尉重政法名道転が子たり

重政の家紋と若井河凡たり

寛永六年 正後

將軍家を詳したくまつ

同十二年九月二十七日小十人の
細路とあり

正茂

源助 生國同前

寛永十九年

將軍家より久たき戸は

正貞

源吉昂 生國武苑

元和九年はりめく

將軍家へ湯へくぬつ

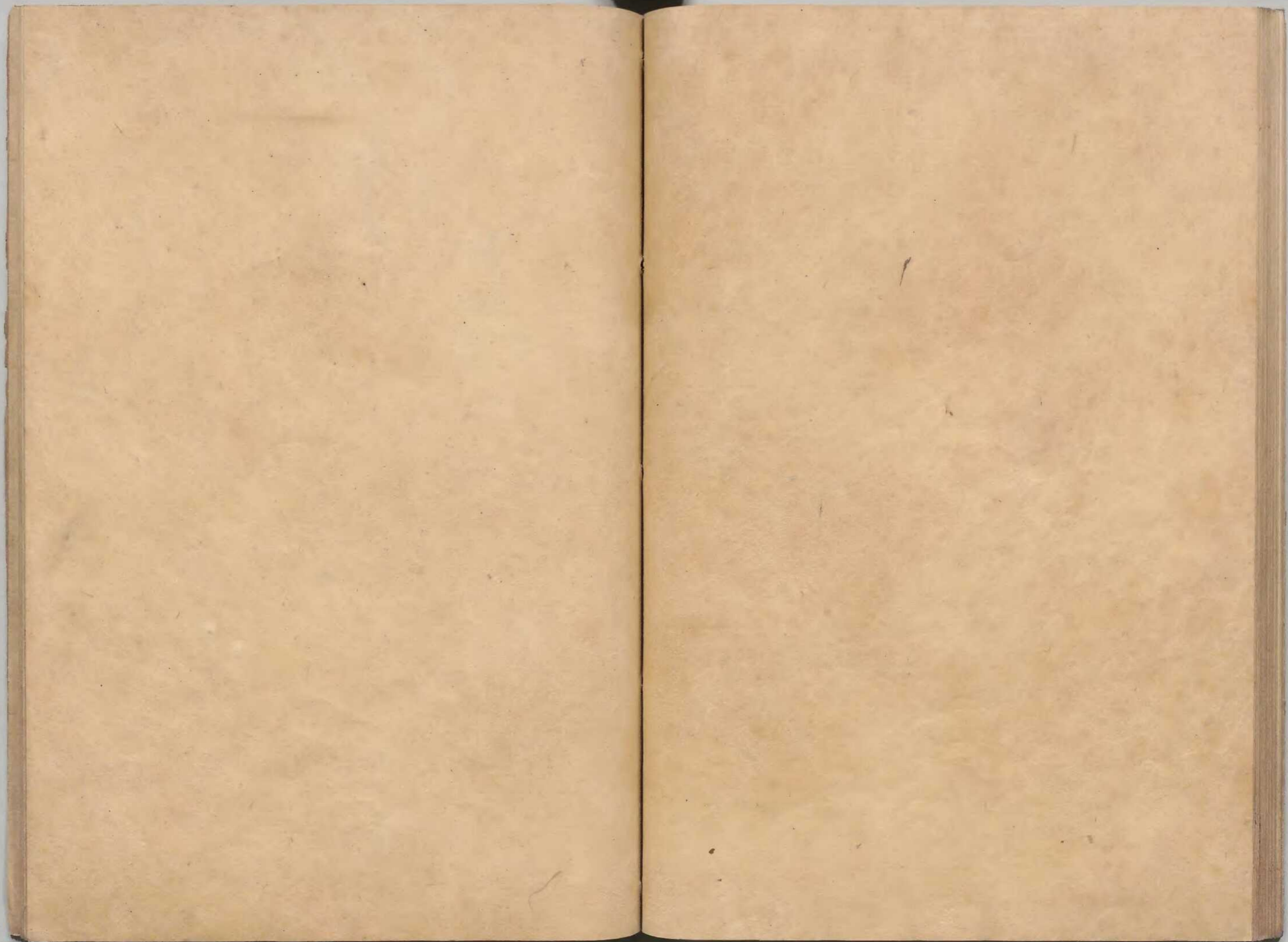
寛永元年はり小姓組の番を勤

同三年同十一年

將軍家へ入浴の時徳をまつ

同十四年御船をいり

家紋と藤の丸に月と右邊
幕紋 四葉木瓜



横地

● 元貞

多丸島尉

生國遠江

武田信玄

三正十年甲州没落の後めうねく

東照大権現小治久たぐりつり大書と

作とめ 合色とく島とる

慶長五年奥列なごびり関原陣より徳寺に

同十二年六月五十一歳に病死法名 香徹

安信

本末馬 生國甲斐

慶長七年酒井雅樂流忠世公并大物法利勝ともいへる先容

右陸院殿より湯一くつり大治
善城はとむ

同十九年 治とがより徳列舟橋乃所殿法作事一の役とつとむ此ゆへり大坂陣よりとむい

え和元年大坂陣のとき諸士は旅宿とむらわらふ事と役一供

將軍家よりつゞくゆつり大津藩
をつとむ

同九年沙入海のち北濱藩

寛永九年沙入海のち北濱藩の徳政

同五年、食禄とくまふゆり

五百石を領す

同十四年奥方の沙藩

安次

左門 生國武藏

寛永十二年より

將軍家より湯

同十九年御書院書

忠重

一節左門 生國武藏

右徳院殿

將軍家よりつゞくゆつり大坂

三人
重根乃也引とつとじ

正義

一節も来

忠まやーなひく子とん実と坂部

五七老射正も子なら

ゆ軍家ーつー

家紋 急甲

父^お叔^は神^{かみ}の^の先^{せん}祖^そ

系^{けい}

又^{また}大^{だい}友^{ゆう} 生^{せい}國^{こく}參^{さん}河^か

長^{ちやう}親^{しん}主^{しゅ}な^なま^まの^のひ^ひり

信^{しん}忠^{ちゆう}主^{しゅ}

清^{せい}康^{かう}君^{きみ}の^のつ^つふ^ふの^のつ^つる^る五^ご十^{じゅう}八^{はち}葉^{えふ}

一^{いち}く^く死^しを

系

又大久 生國同あ
長親之 信忠之 信康君より
まう

六十二歳にーく死す

正家

造酒依 生國同あ

廣忠ひろ ちか

大権現りつゝ
冬別石瀬合戦のとき
江川姉川合戦より
りく

正重

大由大由 生國同あ

大権現

名徳院殿
將軍家小行ふまゝ

家紋

木瓜りり

系

横地

生國尾

織田信長

天正十八年八月廿四歳少

病死

吉次うしよ

幼き巫 生國同お

慶長二年

大権現おほごんげんよりけりてくゆつ

同五年どうごねん圓魚まはら御陣ごじんより信しん

天坂あまざかあきの御陣ごじんふささひま

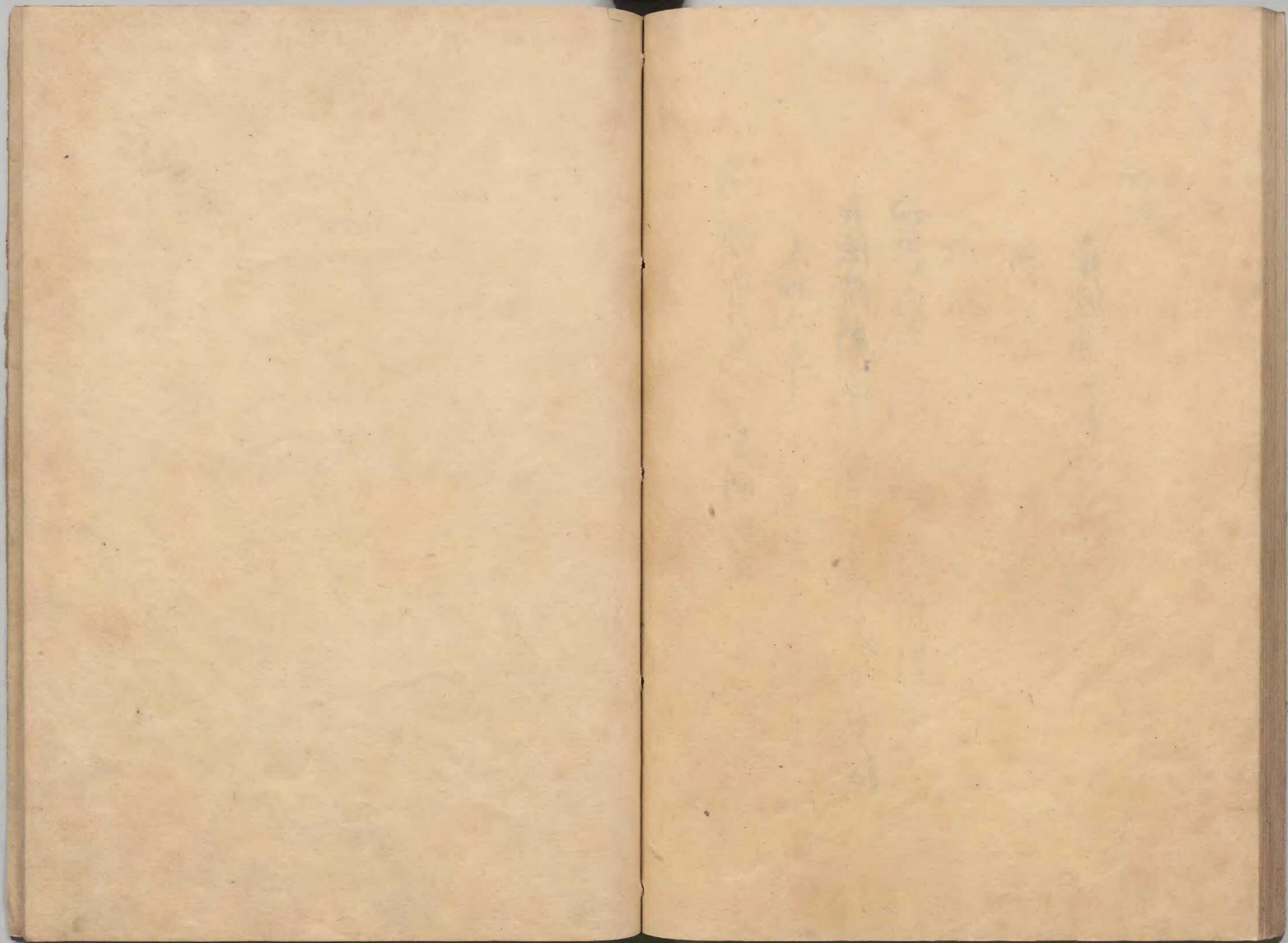
吉網よしあみ

次郎じらうなる為 生國山なまくにやま城

元和八年

右徳院みぎとくゐん殿のりよりつるくまのりくまのりは
物軍家ものぐまけよりつるくまのりくまのりは

象紋ぞうもん 之これ船甲ふねかぶ



横地よこぢ

政吉まさよし

所在是尉しよざいぜい

生國遠江なまくにえ

武田信玄たけだのぶげん了了りょうりょう甲州こうしゅう没落ぼつらくの存のぞん

めうめう

大権現おほいけんげん了了りょうりょうの存のぞん

右徳院殿みぎとくゐん

將軍家了つふまのふ

寛永三年六月十八日了死

政次 まさつぐ

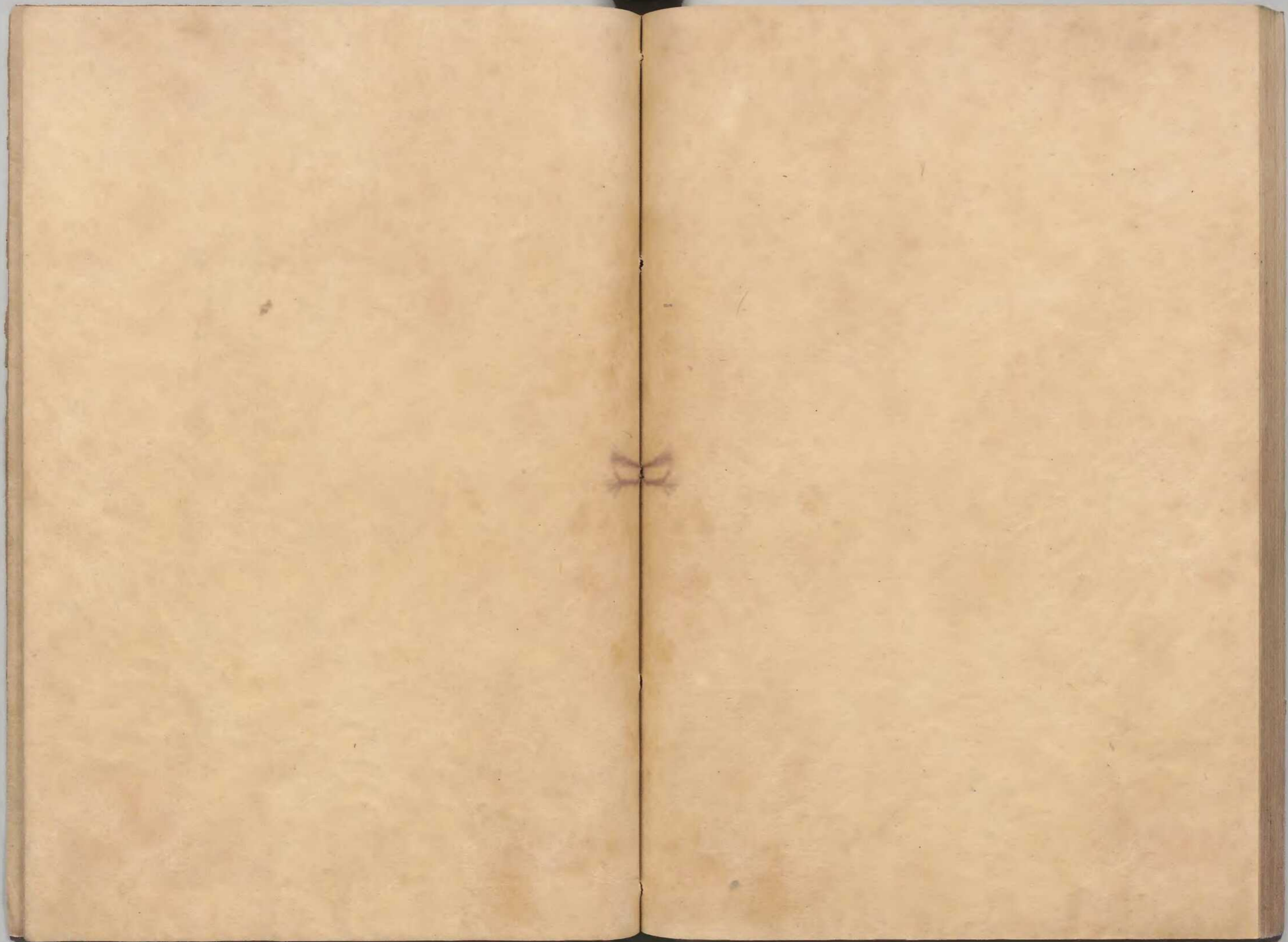
所居為 生園依渡 なまのくに

寛永十一年二月二十八日

將軍家小湯一々々々々々

同日六月六日大御書とつとじ

家紋 龜甲 かめこう



● 重次 しげつ

江戸 いらか

備後守 びごのさむらひ 室町の幕府 むろまちのまくらふ 了 しりぞ

今川義元 いまがわのよしたね 了 しりぞ

後列 ごれつ 了 しりぞ 病死 びやうし 法名 ほうな 宗帳 そうたう

重久 しげひさ

備後守 生國 後河 えごのり ぶごのり

今川 家元 いみがわい 一ツノモ 存を列 濱松小 えんりうのり

をひく

東照大権現と御 とうしょうだいこんげん 一ツノモ いづつのも 好又 このまた

名徳院殿 なとくいん 一ツノモ いづつのも 役事と御 やくじとご

宥免 ゆうめん あり あり 一ツノモ いづつのも 船 ふね

慶長十七年 けicho 武列 ぶれつ 江戸 えど 一ツノモ いづつのも

死 し 一ツノモ いづつのも 歳八十六 さいはちじゅうろく

正重 しょうじゅう

才十郎 さいじゅうらう 生國 いくな 在江 ざいえ

大権現 だいこんげん

名徳院殿 なとくいん

將軍家 しやうぐんけ 一ツノモ いづつのも 歴 れき 一ツノモ いづつのも 戸 と 三 さん

正重 しょうじゅう

才十郎 さいじゅうらう 生國 いくな 武藏 ぶさう

慶長十九年

右徳院殿よりつらつら御切米と

奉り給へり

將軍家よりつらつら御切米と

奉り給へり

正徳

申す由 生國同前

寛永九年

將軍家より賜へり

同十五年 御切米と

正徳

勅十部 生國同前

十八歳乃時より

將軍家よりつらつら御切米と

家紋
檜い
扇あふぎ

比多

● 正元

与十郎 尾州多良賀村より南

織田信長より

天正五年に死す 信長安ん

正吉まさよし

与右少尉 生國同封

東照大権現とうしょうだいこんげんよりつゝくまらる

元和元年四月某日じつに死す

法心淨しやうしんじやう聖せい

正藏まさぞう

清右少尉 生國同封

大権現

名徳院殿なとくいんよりつゝくまらる

正次まさつぎ

清十郎 後列ごりよくよりつゝくまらる

名徳院殿

將軍家しやうぐんけよりつゝくまらる

正永まさなが

右衛門尉

梅列うめり大坂おさかより

大権現

右徳院殿

將軍家しんぐんけより歴しん仕しより

次長

右馬七

生國なまくに山城やましろ

大権現

右徳院殿

將軍家しんぐんけより

家いへ放はな日ひの丸まる梅うめ福ふく内うち

